

「刺青」論

遠藤伸治

日本の近代文学を論じるなかで、谷崎潤一郎の作品に対する評価は、無思想あるいはアクチュアリテイのなさといった言葉によってなされる否定的評価であられ、反近代といった言葉による肯定的評価であられ、なお充分に行われていないように思われる。そして、その理由は、谷崎潤一郎の作品が、近・現代の問題、すなわち、近代に始まり、現代の我々にとっても解決したわけではない問題を提示しているためであるように思われるのである。以下、そうしたことについて、谷崎潤一郎の作品の特徴をよく示していると思われる「刺青」を対象作品として論じてみたい。

「刺青」は次のような文によって始まる。

其れはまだ人々が「愚」と云ふ貴い徳を持つて居て、世の中が今のやうに激しく軋み合はない時分であつた。

この冒頭の文は、書き手の意図と姿勢を示しているように思われる。すなわち、この小説において以下に述べられる事は、書き手および読み手にとっての「今」（以下、単に現在と呼ぶこととする）とは異なる過去——一つの作品世界であることが示され、そして、現在と作品世界との比較がなされているのである。ここで問題となるのが、これら二つの世界の関係であろう。「まだ人々が『愚』と云ふ貴い徳を持つて居て」という表現は、二つの世界の差異を強調しようという書き手の意図を示していると思われる。そして、「世の中が今のやうに激しく軋み合はない時分であつた」と統括していることは、その動機が、激しく軋み合う現在に対する反発・嫌悪といった感情に基づいていることを示していると言えるであらう。

しかし、そうした意図・感情にもかかわらず、作品世界と現在を比較するといふ書き手の姿勢は、二つの世界の差異が、実は両者を比較した上での、言わば程度の差であり、二つの世界は対立物ではなく、同じ特質をそなえた類似物である

ことを示しているように思われる。すなわち、現在においても作品世界においても、問題は「人々」の愚かさや世の中の激しい軋み合いであり、ただ、作品世界において、「人々」はより愚かで、軋み合いの激しさが緩和されているのだ、ということをも冒頭の文は主張しているのではないだろうか。

「刺青」という作品、すなわち、この冒頭の文に続いて述べられてゆく作品世界を、現在とは別のものとする読みは、先に述べた、書き手の意図に対して忠実であると言えるであろう。このように読む場合、作品に対する評価は、現在とは触れ合うことのない無意味なもの、といった否定と、その裏がえしてある肯定、例えば、西欧の近代合理主義を規範としてきた現在とは別の日本の価値がある、といった肯定との間で行われることとなる。

しかし、現在、すなわち、現に今、自分が属している状況との差異、そして状況に対する嫌悪を強調するという意図とともに、そうした感情に基づきながらも、現在に類似した世界を描くという姿勢にも注目すべきではないだろうか。ここに、書き手の何らかの葛藤があるように思われるのである。以下、こうした観点で読み進んでゆくものとする。

殿様や若旦那の長閑な顔が曇らぬやうに、御殿女中や花魁の笑ひの種が尽きぬやうにと、饒舌を売るお茶坊主だの幫間だのと云ふ職業が、立派に存在して行けた程、世間がのんびりして居た時分であつた。女定九郎、女自雷也、女鳴神、——当時の芝居でも草双紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であつた。誰も彼も挙つて美しからむと努めた揚句は天稟の体へ絵の具を注ぎ込む迄になつた。芳烈な、或は絢爛な、線と色とが其の頃の人々の肌躍つた。

ここでは、作品世界、すなわち、物語が展開されてゆくであろう状況が、江戸時代の社会として示される。すなわち、殿様—御殿女中—お茶坊主、あるいは、若旦那—花魁—幫間、といった、支配—被支配の関係にある幾つかの階級が存在

と、そうした階級が存在する社会が極めて安定していることが、まず示されている。つまり、ここに示されている社会は、これら幾つかの階級が明確に隔てられ、「殿様」や「若旦那」といった権力者の地位が、世襲のもの、生まれながらに決定されている絶対的で正統なものとなっている社会である。そして、こうした社会において、美という価値を得ようとする者として、「人々」が示される。彼らの世界、言わば美の領域は、それが含まれている社会との類似点と相違点を持っている。類似点は、強者―弱者、すなわち支配者―被支配者の関係が存在することであり、相違点は、刺青という、これら二つの階級を移動する方法が存在しているということである。こうした、美の領域の論理に基づいて、『愚か』と云ふ貴い徳を持つて居る「人々」が、誰も彼も、美しい者、すなわち強者となるために、挙って刺青をする姿が描かれるのである。

馬道を通ふお客は、見事な刺青のある鴉籠昇を選んで乗った。吉原、辰巳の女も美しい刺青の男に惚れた。博徒、蕨の者はもとより、町人から侍なども入墨をした。時々兩國で催される刺青会では参会者おのおの肌を叩いて、互に奇抜な意匠を誇り合ひ、評しあつた。

刺青によって、美しい者すなわち強者の側をめざす「人々」の例として、吉原へ客を運ぶ鴉籠昇が挙げられ、「博徒、蕨の者はもとより、町人から侍なども」と述べられている。すなわち、「人々」とは、社会の中で支配階級ではないが、例えば農民ほど中央の権力から疎外されておらず、権力に接している者たちであると言ふことができるであろう。そして、「刺青会」といった一種の公的場において、互いに美を競い合い、自分の美を他人に誇示しようとする「人々」が描かれていることは、刺青によって美を得るということが、他人との関係において意味を持つものであること、すなわち社会的なものであることを明らかにしている。こうした他人との関係、すなわち、他人に勝る美を誇示し、他人との差異をできるだけ強調するということのために、刺青は「奇抜」なものでなければならぬのである。つまり、刺青によって美を得ようとする者は、それによって他人より社会的に優位な立場へと上昇したいという欲求、すなわち権力欲に基づいているのであり、こうした社会的上昇志向、権力欲を満たすために、「人々」は刺青の特異な美を求めるのである。

清吉と云ふ若い刺青師の腕きまがあつた。浅草のちやり文、松島町の奴平、こんこん次郎などにも劣らぬ名手であると持て囃されて、何十人の人の肌は、彼の絵筆の舌に就地となつて扱げられた。刺青会で好評を博す刺青の多

くは彼の手になつたものであつた。達摩金はほかし刺が得意と云はれ、唐草権太は朱刺の名手と讃へられ、清吉は又奇麗な構図と妖艶な線とで名を知られた。

ここで、「人々」に美を供給する刺青師として、主人公「清吉」が登場する。彼については、まず「若い刺青師の腕きま」として、すなわち、長い修行を積んで腕をみがく凡人とは違ふ、天才であるかのように書かれている。そして、彼が今までに刺り、好評を博した多くの刺青に共通する性質、すなわち、「奇麗な構図と妖艶な線」という彼の特異性・個性が、「人々」に広く認められていることが示されている。こうしたことは、差異を強調しようとする要素である。「人々」が、「達摩金はほかし刺が得意」、「唐草権太は朱刺の名手」といった形で、特異性・個別性を価値として持て囃すことは、他人との差異をできるだけ強調したいという欲求の表われだと言ふことができるであろう。

しかし、こうした対抗意識は、同時に類似性を必要としている。すなわち、「清吉」は、「ちやり文」や「奴平」といった他の名手たちに劣らぬ者として位置づけられることで、あるいは、「達摩金」や「唐草権太」の個性と比較されることで認められるのであり、そのように「人々」によって認められた個性であるがゆえに、「清吉」の刺青を獲得することが、社会的地位の上昇を示し、その地位の正統性を証明する、文化的価値の指標となりうるのである。ここにおいて「清吉」は、下位の存在から上位の存在へと社会的階梯を登るための通過儀礼を司るシャーマンとして、「人々」に権力を振うことが可能となる。

もと豊国貞の風を慕つて、浮世絵師の渡世をして居たげに、刺青師に墮落してからの清吉にもさすが画工らしい良心と、鋭感とが残つて居た。彼の心を惹きつける程の皮膚と骨組みを持つて人であれば、彼の刺青を購ふ訳には行かなかつた。たまく描いて貰へるとしても、一切の構図と費用とを彼の望むがまゝにして、其の上堪へ難い針先の苦痛を、一月も二月もこらへねばならなかつた。

この若い刺青師の心には、人知らぬ快樂と宿願とが潜んで居た。彼が人々の肌を針で突き刺す時、真紅に血を含んで脹れる肉の疼きに堪へかねて、大抵の男は苦しき呻き声を発したが、其の呻きごゑが激しければ激しい程、彼は不思議に云ひ難き愉快を感じるのであつた。

ここに述べられている「清吉」の二つの性質、すなわち、素材を厳しく吟味し、金銭や他人の思惑などに動かされない、芸術家の良心といったものと、他人に苦痛

を与えて満足するサディズムとは、全く別のもののようにみえる。前者は、「刺青師に墮落」する以前に、「豊国園貞」といった浮世絵師から受けついだ正統な「画工らしい良心」と書かれており、一方、後者は、心に潜んでいる、「人知らぬ」、「不思議に云ひ難き愉快」と述べられている。しかし、別のものであるかのように書かれてはいても、これら二つの性質は、他人との差異を可能なかぎり強調し、獲得した地位を正統化し、絶対化したいという欲求、すなわち「人々」の欲求と同じものに基づいているように思われる。

すなわち、社会的上昇をめざすゲームに参加している「人々」が、上昇の機会をなんとかしてつかもうとするがゆえに、「清吉」は鷹揚にかまえることで彼らとの差異を強調し、また、美を与えて社会的に上昇させるかどうかを決定する基準として、骨組みや皮膚といった、自然の、動かすことのできない天与の資質を採用することで、自分の権力を正統化し、絶対化しようとするのである。そして、「人々」を単なる「統地ムネちとして」、すなわち、刺青という自らの目的を達成するための手段として扱い、彼らに苦痛を与えることによって自分の支配力を誇示し、それに満足するのである。

以上のように、作品世界の中にも激しい軋み合いは存在している。「人々」は、社会的上昇志向・権力欲といったものに基づいて、他人に最も強く働きかけ、他人との差異をできるだけ強調してくれる、強烈で特異な美を求めている。そして、自分の優位が絶対に失われることのないように、そうした優位の指標である美を自らの肉体に刺り込み、その美を競い合っているのである。主人公「清吉」は、そうした権力をめざして競い合う「人々」の頂点に立つ権力者であり、「人々」に苦痛を与えることによって権力欲を満足させ、芸術家としての良心といったものによって、自らの地位の絶対化に努めているように思われる。こうしたことは、書き手が冒頭において示した感情、すなわち、激しく軋み合う世の中に対する反発・嫌悪といったものと矛盾するように思われる。このような矛盾を含んだ作品世界において、以下、どのような物語が展開されてゆくのであろうか。

作品における時間的なもの、すなわち、物語の展開の要素は、先に引用した部分において、すでに導入されている。それは、「清吉」の持っている「宿願」である。「宿願」といったものは、それが果たされるか、あるいは果たされずに終わるか、という関係において意味を持つものであり、作品内に時間的要素を導くものであると言える。

「清吉」の「宿願」については、次のように述べられる。

彼の年来の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込む事であつた。

つまり、物語は、「清吉」が「己れの魂を刺り込む事」をめぐる展開するのであるが、それに伴って、女という性的要素が焦点化されていることが注目される。女という性的要素は、「女定九郎、女自雷也、女鳴神——当時の芝居でも草双紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であつた。」、あるいは、「清吉は又奇麗な襟図と妖艶な線とで名を知られた。」といった表現によって、すでに伏線として張られていたものが、ここで、「宿願」の「光輝ある美女」として浮かびあがるのである。

この「宿願」の「光輝ある美女」の登場については、次のように描かれる。

丁度四年目の夏とあるゆふべ、深川の料理屋平清ひらせいの前を通りかゝつた時、彼はふと門口に待つて居る鴛籠の籠かごのかけから、真つ白な女の素足のこぼれて居るのに気がついた。(略)

その女の足は、彼に取つては貴き肉の宝玉であつた。拇指おやゆびから起つて小指に終る繊細な五本の指の整ひ方、絵の島の海辺で獲れるうすべに色の貝にも劣らぬ爪の色合ひ、珠のやうな種たねのまる味、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗ふかと疑はれる皮膚の潤沢。この足こそは、やがて男の生血に肥え太り、男のむくろを踏みつける足であつた。この足を持つ女こそは、彼が永年ながねんたずねあぐんだ、女の中の女であらうと思はれた。

これらの表現の意図は、「宿願」の「美女」が、「彼が永年ながねんたずねてきた他の女たちとは違う、はるかに美しい女であり、「魂を刺り込む」に足る、唯一人の、「女の中の女」であることを示そうとするもの、すなわち、差異をできるかぎり強調し、絶対性を求める方向にあるように思われる。しかし、実際に表現の上にあらわれているもの、すなわち、宝玉のようだから貴い、整っているから美しい、絵の島の貝のようだから美しい、岩間を流れる、清冽な水のようにだから美しい、といった類のものは、同語反復といった印象を与えるほど当り前の平凡なものであり、古典的・伝統的美、すなわち、すでに一般に認められた美の指標の収集にすぎない。したがって、これらの表現は、差異をできるだけ強調し、絶対的美を求めようという意図とそのための努力を示すと同時に、すでに認められた既成の美の指標によってその正統性を主張しようとするもので、逆にその限界を示していると言ふことができるであらう。

また、ここで、「女」という性的要素は、さらに焦点化され、「男のむくろを

踏みつける足」を持つ「女」、すなわち、強者としての「女」と弱者としての男といったことが示されるのであるが、この場面においては「女」の乗った駕籠は見失われ、物語は次の場面に移る。

清吉の憧れこゝちが激しき恋に変わつて其の年も暮れ、五年目の春も半ば老い込んだ或る日の朝であつた。彼は深川佐賀町の寓居で、房楊枝をくばえながら、錆竹濡れ縁に万年青の鉢を眺めて居ると、庭の裏木戸を訪ふけはひがして、袖垣のかげから、つひぞ見馴れぬ小娘が這入つて来た。

そして、「清吉」はこの「小娘」が、先に彼が見かけた「宿願」の「美女」であるかどうかを確かめるために、「料理屋平清」へ行つたことがあるか、とたずねる。

「え、あの時なら、まだお父さんが生きて居たから、平清へもたび／＼まゐりましたのさ」

と、娘は奇妙な質問に笑つて答へた。

ここにおいて、「己れの魂を刺り込」みたいという「清吉」の「宿願」が、「激しき恋」と書かれ、そして、その「宿願」の「美女」が、「奇妙な質問に笑つて答へ」、「清吉」の言葉の意味など気にかけることのない、ごく普通の純真で無邪気な「娘」として登場していることが注目される。この「娘」に、「清吉」は、次のような二本の絵巻物を見せる。

それは古の暴君村王の寵妃、末喜を描いた絵であつた。瑠璃珊瑚を鑲めた金冠の重さに得堪へぬなやかな体を、くつたり勾欄に靠れて羅綾の裳裾を階の中段にひるがへし、右手に大杯を傾けながら、今しも庭前に刑せられんとする犠牲の男を眺めて居る妃の風情と云ひ、鉄の鎖で四肢を銅柱へ縛りつけられ、最後の運命を待ち構へつゝ、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉ぢた男の顔色と云ひ、物凄いと巧に描かれて居た。

娘は暫くこの奇怪な絵の面を見入つて居たが、知らず識らず其の瞳は輝き其の唇は顫へた。怪しくも其の顔はだん／＼と妃の顔に似通つて来た。娘は其処に隠れたる真の「己」を見出した。

「この絵にはお前の心が映つて居るぞ」かう云つて、清吉は快げに笑ひながら、娘の顔をのぞき込んだ。

この一本目の絵巻物に描かれているのは、「古の暴君」、すなわち、過去の絶対的権力者の世界である。しかし、権力を誇示し、権力に満足する者として描かれているのは、その暴君ではなく、寵妃である。このとき、彼女が振う権力は、男

を魅きつける女としての性的な力に基づいていると言ふことができるであらう。つまり、ここにおいて、権力が、男を魅きつける女の性的な力に置き替えられているのである。

もう一本の絵巻物と、それを見せられる「娘」の様子は次のようなものである。それは「肥料」と云ふ画幅であつた。画面の中央に、若い女が桜の幹へ身を倚せて、足下に累々と斃れて居る多くの男たちの屍骸を見つめて居る。女の身辺を舞ひつゝ、朝歌をうたふ小鳥の群、女の瞳に溢れたる抑へ難き誇りと欲びの色。それは戦いの跡の景色か、花園の春の景色か。それを見せられた娘は、われとわが心の底に潜んで居た何物かを、探りあてたる心地であつた。

一本目の巻物において、権力に置き替えられたもの、すなわち、男を魅きつける女の性的な力が、ここでは、さらに、「肥料」を吸収して美しい花を開く植物の力、つまり、動かすことのできない自然の法則、絶対的秩序として描かれている。したがって、二本の絵巻物は、まず、過去の絶対的権力を示し、それをさらに絶対化しようとするという、一見奇妙に思える志向を表わしているように思われる。しかし、それは、次のように考えるならば、筋の通つたものになるであらう。すなわち、一本目の巻物において示された、絶対的権力は、求めながらも獲得することのできない、憧れの対象なのであり、そうした絶対性を求めつつも、実際に獲得できるものは単なる類似物にすぎず、それゆゑに、懸命に絶対化に努めなければならぬのである。

一方、こうした絵巻物を見せられた「娘」については、「其処に隠れたる真の『己』を見出した。」と、また、「われとわが心の底に潜んでいた何物かを、探りあてたる心地であつた。」と述べられている。これらは、我々に、例えばフロイトイズムといったものを想起させ、ここで起こつた「娘」の変化を、ごく自然なこのように、リアリティのあるもののように思わせる。確かに、「娘」の見出したものを「真の『己』」と呼ぶ書き手の意図、そして、「この絵にはお前の心が映つて居るぞ」と笑う「清吉」の意図は、このような無邪気な「娘」の内になんか、すなわち、すべての人間の内に、絶対的権力への志向、権力を誇示し権力を振う欲びといったものが潜んでいることを、自然的事実として示し、それを認めさせようとするものであらう。

しかし、事実は、むしろ逆であることも忘れてはならないであらう。すなわち、「娘」は、「清吉」によつて、絵巻物を手本として示されたからこそ、それに従つたのであり、そうでなければ、絶対的権力への志向に自然に目覚めることなど

決してなかつたであらう。ここで問題となるのは、絶対的権力への志向が、真似るべき手本として示され、それによって、それまで権力欲といったものとは無関係であつたと思われる「娘」に、絶対的権力が移されてゆくことを、自然的事実として描こうとしている書き手の姿勢であると思われるのである。

このように、「娘」に、自分の中にも絶対的権力への志向が潜んでいるということを確認させた後、「清吉」は「娘」を麻酔剤で睡らせて刺青をする。したがって、先に描かれていたような、刺青をする相手の苦しむ姿に愉快を感じる「清吉」の姿は描かれない。替わりに描かれるのは、「清吉」自身が苦しむ姿である。

若い刺青師の霊は墨汁の中に溶けて、皮膚に滲む。焼酎に交ぜて刺り込む琉球朱の一滴々は、彼の命のしたよりであつた。彼は其処に我が魂の色を見た。

いつしか午も過ぎて、のどかな春の日は漸く暮れかゝつたが、清吉の手は少しも休まず、女の眠りも破れなかつた。(略)

月が対岸の土州屋敷の上にかかつて、夢のやうな光が沿岸一帯の家々の座敷に流れ込む頃には、刺青はまだ半分も出来上らず、清吉は一心に蠟燭の心を掻き立てゝ居た。

一点の色を注ぎ込むのも、彼に取つては容易な業でなかつた。さす針、ぬく針の度毎に深い吐息をついて、自分の心が刺されるやうに感じた。

ここでは、「清吉」は、先に述べられていた天才的刺青師としてではなく、刺青を完成させるといふ目的のために、命をしたらせ、一点の色を刺り込むのも苦勞し、一針一針に吐息をつきながらも、昼から夜、そして朝へと休むことなく一心に努める者として描かれている。それは、一面では、普通の「人々」との差異を強調し、天才として「人々」に権力を振うこと、すなわち、自らを絶対的権力者とするこの断念を示していると言ふことができるであらう。また、一面では、自分を絶対的価値に仕える者として意識することは、自らを絶対的権力者たらんとして軋み合うことからの解放感をもたらすとも言えるであらう。

そして、こうした創作態度、すなわち、美という目的のために懸命に努めるという態度は、この「刺青」といふ作品における書き手の態度でもあるように思われる。数多くの対句的表現、あるいは、対称的で均整のとれた構成、豊かな語彙、といった表現上の特徴は、美という目的を果たすための絶えまない努力と工夫といふ創作の身ぶりを示し、伝えようとしていると思われるのである。

このような態度で、「清吉」が刺る刺青は、次のようなものである。

針の痕は次第々々に巨大な女郎蜘蛛の形象を具へ始めて、再び夜がしら／＼と白み初めた時分には、この不思議な魔性の動物は、八本の肢を伸ばしつゝ、背一面に蟻つた。

この刺青は、先の二本目の絵巻物と同様の意味内容を持っていると思われる。すなわち、男を魅きつける女の性的な力として表わされた権力が、さらに、女郎蜘蛛の「不思議な魔性」、つまり、交尾の後に雌が雄を喰うという、動かしがたい自然の秩序として示されているのである。そして、さらにたどってゆけば、物語の展開以前において示された刺青の意味内容、すなわち、社会的地位の上昇を示し、その地位の正統性を証明する、文化的価値の指標から、その人為性・社会性が消去され、絶対的な、自然の秩序として、それが示されているのである。

刺青の完成後、物語は次のように終わる。

その刺青こそは彼が生命のすべてであつた。その仕事をなし終へた後の彼の心は空虚であつた。

(略)

「親方、私はもう今迄のやうな臆病な心をさらりと捨て、しまひました。——お前さんは、真先に私の肥料になつたんだねえ」と、女は剣のやうな瞳を輝かした。その耳には凱歌の音がひびいて居た。

「帰る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ」

清吉はかう云つた。

女は黙つて、頷いて肌を脱いだ。折から朝日が刺青の面にさして、女の背は燦爛とした。

すなわち、物語の終わりで、「清吉」は、自ら作りあげた、新しい絶対的権力者である「女」を拝跪する最初の一人となり、そして、その権力の絶対性を示す刺青が光り輝くのである。

ここで、以上のような物語の展開を整理し、さらに、「刺青」といふ作品全体についてまとめてゆくこととしたい。

まず、物語の展開において、「清吉」が「己れの魂を刺り込む」といふことは、すなわち、それ以前に「清吉」が担っていた、絶対的権力への志向の頂点に立つ者という役割を、「娘」に移し替え、そのかわりに、「清吉」は、権力者となつた「娘」を崇拜する側にまわる、ということである。

このことは、「清吉」個人にとつて、自らを絶対的権力者とする野心の断念で

ある。「清吉」は、物語の展開以前においては、美によって絶対的権力を志向する「人々」の頂点に立つ、すなわち、絶対的権力者に最も近づいた者であった。しかし、彼は決して絶対者となることはできない。なぜなら、美を「人々」に与える者としての彼の権力は、美を求める「人々」の存在によって支えられているからである。美の領域には、数多くの階級は存在せず、美しい強者と醜い弱者という二つの階級だけが存在し、そして、ある程度の経済力と、痛みを我慢する意志とさえあれば、誰でも刺青によって、美しい強者の側に属することができるといふ理念に基づいた。このような、美すなわち権力は誰にでも平等に解放されているという理念に基づいた、美の領域への「人々」の自己投金によって、「清吉」の権力、そして存在が、こうした美の領域の秩序・システムに依存しているのである。もし、「清吉」という個人が、そうした秩序を超えた絶対的存在となりえたならば、それは同時に、システムの崩壊を意味し、逆に、彼を何者でもないむなしい存在とするであろう。それゆえに、「清吉」は、一針一針に苦しみ、苦痛を自ら引き受け、苦痛も厭わず美を求める「人々」と同じ側、美という価値に服従する「人々」の側に加わることで、美における自由と平等といった理念、美の領域の秩序を支えなければならないのである。こうした彼の限界は、彼が絶対的権力者に近づき、「人々」に権力を振えば、逆にそれだけ、権力を振る対象としての「人々」と共存しなければならないという形であらわれてくるのである。

以上のように、絶対的権力を志向しながらも、実際には相対的権力しか獲得できないがゆえに、「清吉」は、自らを絶対者とすることを断念し、「娘」を身替わりにするのであるが、そこで重要な役割を果たすのが性的要素である。すなわち、物語の展開以前に示されていた、美の領域における社会的地位の上昇という通過儀礼に替わって、「娘」が、男を魅了する「女」に変わるという性的通過儀礼が物語として展開されているのであり、そして、社会的上昇志向に基づいて美に魅きつけられる「人々」という状況が、恋する男、つまり、女に魅かれる男の物語へとすり替わっているのである。こうした物語の展開によるすり替えは、初めに示された社会的、相対的関係を、男が女に魅かれるという自然的事実に置き替えることによって、絶対化しようとするものであると言いうことができるであろう。美の持つ力、美の領域の秩序は、その頂点に立つ者を、「清吉」から「娘」に替えることによって、より絶対的で正統なものとなるのである。

しかし、「清吉」のこの断念は、彼の権威の失墜を意味しないであろう。「清吉」は、「娘」を自分に替わる絶対者とし、美の力、美の領域の秩序を絶対化する

のために、自分の魂を捧げ、命を磨り減らす者として描かれている。こうした、命を犠牲にすることを厭わぬ献身、禁欲主義は、初めに描かれた、「清吉」の享乐的姿、若い腕ききとして「人々」に持て囃され、「人々」の差異を強調し、「人々」に苦痛を与えることで権力欲を満たしていた姿を否定し、消し去るかのよう思われる。しかし、こうした献身ぶり、すなわち、美の魔力の前にまっ先に肥料となる彼の魂、一点の色を刺り込むのにも苦勞し、一針一針に吐息をつきながら一心不乱に努める彼自身の姿が、彼の刺青によって表現され、「人々」の知るところとなれば、逆に、他の誰よりも美のために苦しみ、犠牲を払い、それを崇拝できる者であるから、他の誰よりも美を扱う資格を持つという存在証明として、美の領域における彼の地位をより強固にするであろう。物語の最後において示された、「空虚」になってしまった「清吉」が、もし、二度と刺青をしなかつたとしたならば、一つの刺青に生命を燃やしつくし、二度と刺青をしなかつた天才刺青師として、「人々」に以前よりさらに持て囃されると思われるのである。

したがって、「清吉」が自らを絶対者とすることを断念し、替わりに「娘」を絶対者とするために示す禁欲的姿、懸命に努力する勤勞の倫理といったものは、美の力、美の領域の秩序を絶対化し、安定させると同時に、その秩序に依存している彼自身の存在を支えるものであると言いうことができるであろう。「娘」を絶対者として祭り上げることは、自らが絶対的権力を志向し続けるための虚構なのである。「清吉」は、絵巻物という形で、絶対的権力者の手本を「娘」に示し、絶対的権力への志向を自然的事実と思わせることで、「娘」を絶対的権力を志向する者に、すなわち彼自身を真似る者、彼の類似物に仕立て上げ、彼自身の類似物としての「娘」によって間接的に自らの絶対的権力への欲求を志向し続けるのである。

そして、こうした、絶対的権力への志向、それにもかかわらず実際には絶対者ではありえないがゆえの断念、しかし、自らに替わる絶対者を作りあげることによって間接的に絶対的権力への欲求を志向し続ける、といったことは、「清吉」についてだけではなく、彼が属している美の領域を構成している「人々」についてもあてはまるように思われる。

作品の初めの部分において、自分たちの権力を世襲の、生得的で絶対的なものとしている支配階級が登場する。そして、「人々」は、そうした絶対的で正統な支配階級ではないが、それと全く無縁な者ではなく、身近に接する者として描かれる。すなわち、「人々」が絶対的権力を志向するのは、彼らの前に存在する支

配階級を絶対的で正統なものとして認め、彼ら自身、そうした支配階級に近づきたいと願うからであると思われる。自分たちが獲得した美、すなわち力を、「人々」が誇示し、正統なものとして認めさせようと努めるのは、彼らの前に、権力が正統なものとして示されているからである。また、「娘」に絵巻物を見せることで、あらゆる人間の中に絶対的権力への志向があることを自然の秩序とする認識のあることを示した「清吉」の考えは、眼前の支配階級が絶対的権力を持っているという状況を自然の秩序として認め、支配階級が持っている権力を、自分たちが獲得しようとするのも自然の秩序であるとする「人々」の考えに基づいていると言うことができるであろう。

そして、こうした、絶対的権力を志向する「人々」は、美という形で権力を解放し、そこでは、誰でも、自分の意志に基づいて、美すなわち権力を獲得できるものとされている。この、言わば自由と平等の原則に基づいて、「人々」は互いに対抗意識を燃やし、競い合うのである。このように考えてみると、「刺青」という作品に描かれているのは、ほかならぬ近代に始まる問題であると言うことができると思われる。

しかし、美という形で絶対的権力を志向するということは、実際の権力を直接獲得しようとすることの断念である。「人々」は、彼らが属する社会において、直接、支配階級そのものと競い合い、その権力を奪い取ろうとはせず、そうした社会を模倣した、美の領域といった類似物の中で、間接的に絶対的権力を志向しているのである。「人々」が、天才的な刺青師を持って嗤し、刺青師が絶対的権力を振うことを認め、そして、作品の後半に仄めかされているように「女」を崇拜するようにするのも、間接的に絶対的権力を志向しているからであると思われる。ここにおいて、美という形で権力を獲得することは、社会において直接権力を得ることを補償し、美の領域の秩序が安定することは、社会の秩序の安定を支えていると言うことができるであろう。美を生み出す者としての天才の讚美、そして美を生み出すために懸命に努力する創作態度、金銭や他人の思惑などに動かされない芸術的良心と高拙で贅沢な生活、奇拙で刺激的なきらめく美と既成の伝統的な美、社会的・相対的なものとして示された美と美的快楽の根源を性的快楽に求めるような物語の展開、作品中のこうした種々の要素が、絶対的の美への志向によって絶対的権力への志向を補償し、社会秩序の安定を脅やかすことなく権力欲を満たすという機能において、一致するように思われるのである。

こうした社会秩序の安定への志向は、冒頭の文において示された、激しく軋み

合うことへの嫌悪という、書き手の感情に基づいていると言えるであろう。すなわち、現在における、直接的な権力獲得競争の激しさに、書き手は、不安を感じているのであり、権力をめぐる争いを緩和し、不安をとり除くものとして、美による間接化を主張していると思われるのである。作品「刺青」において、実際の権力から遠い者、すなわち、権力を志向する「人々」ではない、芸術的人間である「清吉」が、そして、さらに「清吉」よりも権力から遠い無邪気な「娘」が、逆に、権力への志向の頂点に立つ者として崇拜されるのは、彼らが、権力への志向が潜在的に含んでいる激しい競争への不安を忘れさせてくれるからであり、彼らを崇拜することで、権力への志向を持ちながらも安心していえることができるからであると思われる。

以上のような性格をもったこの作品が、社会において直接権力を得ようと人々が競うことが当然の、自然の秩序であると考えられた時期、例えば、白樺派やプロレタリア文学の理念が指導的であった時期において、否定的に評価されたこととは、容易に領けるように思われる。権力を獲得するために争うことを自然の秩序とするような観点に立てば、「刺青」といった作品は、当然のことを述べているだけであり、しかも、それをまわりくどく、不十分に述べているにすぎないものになるであろう。無思想といった評価は、こうした、近代的観点からみたとくに、近代的要素は、あって当然のものとして問題にならず、意識にのぼらないということに基づいていると思われるのである。

そして、戦争や流血の革命といった形で、権力を獲得しようとする過激な争いの代償が強く認識されるようになった後、すなわち、現代において、そうした危険を回避するものとして、権力への志向を間接化し、より無害な形に置き替えることが、肯定的評価として浮かびあがってくることも当然のことであると思われる。

現代において、秩序を支えているのは、作品「刺青」において描かれたような美による間接化よりも、はるかに複雑な間接化であるように思われる。我々は、複雑な組織の中の向上をめざし、生活を豊かにすると思われるさまざまな文化的価値を獲得しようとして競い合い、獲得した文化的価値を指標として誇示することによって、そうしたものを価値とする秩序、すなわち、社会秩序を支えているのであろう。

以上のように、「刺青」といった作品は、そして、それは谷崎潤一郎の作品全

体と言ってもよいように思われるのであるが、近代に始まり、現代においても解決していない問題を我々に提示しているように思われるのである。我々もまた、良いにしろ、悪いにしろ、その類似物、すなわち、かつてあった権力構造の類似物によって、権力欲を補償し、秩序の安定を支えているのであるから。

注 以下の引用はすべて『谷崎潤一郎全集』（中央公論社）によったが、その際、旧漢字は新漢字にあらためた。